

第375号 (令和元年9月16日(月)発行)

発行所
京都女子大学 宗教部
京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075 (531) 7074

華利陀芬

たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。
「快樂の味は短くて苦痛である」と知るのが賢者である。
〔ダンマパダ〕一八六



諸行無常が わからない 西 義人

金の無常・銀の無常

「あなたが落とされたのはこの金の無常ですか。それともこの銀の無常ですか」

「いえ、私の無常はそんなにすごい無常ではありません。仏教の本で読んだり、お話を聞いたりしただけの、受け売りの無常です」

「あなたはとても正直ですね。ごほうびにこの金の無常と銀の無常と、さらに今ならもうひとつ、真正正銘のガチ無常を差し上げましょう」

「や、いららないんですよ。……」

無常の二〇一八年

今年二〇一九年一月はじめ、父が亡くなりました。私の家は北海道東部の町にあります。火葬場に向かうバスの窓から、腹立たしいほどに晴れた空の下でキラキラ輝く太平洋を眺めつつ、急な事態にまだ呆然とする頭で妄想していたのが、このしようもないパロディでした。

思えば去年二〇一八年、何度「無常」ということを考え、語ってきた

ことでしょうか。六月の大阪北部地震、七月の豪雨、九月の台風二十一号、そしてその直後に発生した北海道胆振東部地震など、大きな自然災害が何

度もありました。特に九月の台風と地震で自分や実家が当事者になったことで、自分の生活基盤が実はきわめて面白い、次の瞬間にはどうなっているかわからない無常のものであることを痛感させられました。

また二〇一八年は、以前の『芬陀利華』の記事や「みりの時間」でファンであることをカミングアウトしたメタルダンスユニット・BABY METALも、バンドを支えてきたギタリストの急死やオリジナルメンバーの脱退という激震に見舞われていました。どんなバンドだって何もかも順風満帆なんてことはありません。ありえないのはわかっています。でも、それによって

もあまりに急激で衝撃的。無常でした。そして何より二〇一八年は、自分自身が仏教の講義で「釈尊は無常を繰り返して説いたのです」ということを、学生の皆さんにそれこそ何度も何

度も繰り返し語っていたわけですね。

その二〇一八年が明けると直後の、父との死別。あなた今まで無常無常と語ってきたけど、真正正銘のガチ無常はレベルが違うでしょ、とどこかから言われているような気分でした。

机上の無常

八十歳手前の父でしたから、これまで死別を意識しなかったなどということはもちろんありません。本人も含めて家族でいざというときの話もたびたびしていました。頭では、準備していたつもりだったのです。

しかも考えてみれば、父が亡くなる二日前まで年末年始の帰省で一緒に過ごして仏法の話をすることもできたし、亡くなる五時間前には電話で他愛のない話をしたりもしていました。実家にあまり顔も見せない不肖の息子にしては十分すぎるくらいは出来た、最後の時間だったはずなんです。

それでも湧いてくるのは、ああしてあげようかと思ったこと、後悔ばかりだった。ではどんな別れ

いくべきなのでしょう。大切なものが失われたときだけ無常を感じるなどというのは、しよせん好き嫌い、自分中心のものの見方でしょうかありません。

ため息と安らぎ

父の顔を見てから葬儀が終わるまでずっと、こんなことをぐるぐると考えていました。だから念を称えるときも、出てくるのは、はあ、なんてこった、なんまんだぶ、というため息のような念仏ばかり。浄土真宗の念仏は阿弥陀仏への感謝とよろこびの念仏と言われ

これまで様々な立場で子どもと関わってきました。保育学生、遊戯療法セラピストを経て現在では子ども・子育て支援者として子どもや保護者に関わっています。かつては、直接子どもとふれあう中で手応えを感じ、ワクワクするような高揚感を満喫していました。やがて、立場や状況が変わり、子どもと直接ふれ合う機会が減ってきたことを、少し寂しく感じていました。

令和元年10月 月例礼拝日程表

日	曜日	講時	対象学生	担当	講師
7	月	1	現社1A・1B	中西・野村	山岡 未奈
		2	史学1A・1B	野村・上野	清家 遥香
		3	国文1A・1B	普賢・黒田	田中 希望
		4	児童1	黒田	浮田さおり
8	火	1	心理1	森田	山岡 未奈
		4	英文3A・3B	黒田・清基	山岡 未奈
		1	養育1	森田	田中 純
		2	福祉3	黒田	田中 希望
10	木	1	現社3C・3D	森田・普賢	岩田 優香
		4	現社3A・3B	赤井・藤井	浮田さおり
		1	食物1A・1B	塚本・井上	中山 愛
		2	教育1	三浦	岩田 優香
15	火	3	児童3	秋本	清家 遥香
		1	教育3	西	松田 紗季
		3	造形3	森田	久能 佳歩
		1	法学1A・1B	藤井・秋本	松田 紗季
18	金	1	英文1A・1B	秋本・三浦	久能 佳歩
		2	心音3	塚本	ガハブカ奈美
		4	現社1C・1D	那須・安田	宮田 結
		1	造形1A・1B	井上・上野	岩田 優香
21	月	2	食物3	普賢	板倉 実優
		4	史学3A・3B	竹本・那須	板倉 実優
		1	法学3	清基	中山 愛
		3	国文3A・3B	森田・普賢	宮田 結

るけれど、それとはほど遠いのではないかとこのありさまであります。ですが、それでも、そこには確かにほのかな安らぎがありました。こんなふうにしようもなく愚かなものを阿弥陀仏は丸ごと受けとめてくれていた。自分がしつかりした

いと父と浄土で会えない、なんていう心配は一切ない。ため息の念仏と一緒に、今まで聞いてきたその教えが浮かび上がってきて、どうしようもない自分をゆだねることができていたのです。この時のための仏法だったんだな、と思いました。

次は自分か他の人か、どちらにしろ必ずまた別れの時はきます。やっぱりこれが、生きている中で一番つかい問題のようです。それを丸ごと引き受けてくれる仏法すごい。そんなことが改めて感じられた、今年の冬の出来事でした。

子どもたちとともに ④ 子どもと関わる学生とともに

子どもと関わる立場です。子どもと関わってきました。保育学生、遊戯療法セラピストを経て現在では子ども・子育て支援者として子どもや保護者に関わっています。かつては、直接子どもとふれあう中で手応えを感じ、ワクワクするような高揚感を満喫していました。やがて、立場や状況が変わり、子どもと直接ふれ合う機会が減ってきたことを、少し寂しく感じていました。

生もとても緊張していました。ところが、回を重ねる毎に学生たちは活き活きと絵本の世界に子どもたちを誘うようになり、子どもたちも絵本の世界に入り込んでいきました。最終日のこと。子ども

も私たちは、「来るぞ、来るぞ」と云わんばかりに、飛び跳ねる様子が描かれている「ぴよん」(まつおかたつひで、2000)を読んでもらった子どもたちは、最初はぼかーんとしているように見えましたが、読み手や周りの学

室に分離して、それぞれ

も私たちは、「来るぞ、来るぞ」と云わんばかりに、息をのむようになってきた。縮こまらせていました。そして、学生が絵本のページをめくると同時に、一斉に「ぴよん」と飛び跳ねたのです。この光景に私は息をのみ、静かな感動が全身に広がっていくのを感じました。

子どもと直接関わって感じられる喜びだけではなく、子どもと学生が深くふれ合っていく過程に立ち合える喜びもあることを知ったひとときでした。



〔児童学科・瀬々倉玉奈〕



家政学部教授 太田 貞司

語る場を創る

東京の下町・荒川区で

この6月に開催された「荒川区男性介護者の会(オヤジの会)」25周年記念の会に、「会」の活動を振り返り男性介護者の未来を改めて考えようという呼びかけに応じて男性介護者や支援者など50人を超える人たちが集まりました。長年の苦勞のねぎらいとともに25年を祝う会でした。この「会」は、家族を介護していた会長荒川不二夫さんの呼びかけで1994年に生まれました。

荒川さんが介護を始め

た頃は介護保険制度もなく、なれない家事や介護に戸惑いの連続で、自分たちが苦勞してきたことを、介護している人たちに伝えることができなかった。その人が抱えている悩みや苦勞を少しでも軽減できるのではないかと、荒川さん自身の体験からくる思いがこの「会」をつくる動機でもありました。また、当時、マスコミに報道されていた「介護心中事件」が荒川区で起きないようにという強い思いが荒川さんにもありました。当時、私は地域の保健所の非常勤相談員として、荒川さんの介護の姿を間近で見えてきましたので、その思いがよくわかりました。現在、荒川さんは80歳を超え施設での生活ですが、当日参加し元気な顔を見

せていました。

まず、荒川さんが心がけたのは、「気軽に語れる場を持つ」ということでした。男性はこうした場にはなかなか集まりません。集まっても話をしませんが、男性介護者が話しやすいようにと、お酒を用意する工夫も重ねてきました。この25年間、実に多くの人たちが集まってきました。また、当時、介護者だけでなくはありませんでした。医療・介護・福祉の現場の関係者も参加し、男性介護者を学ぶ場にもなりました。多くのマスコミ関係者も来て報道されました。中には、取材というよりも勉強に来て、会員となつて活動を支援する人もいました。参加者は区を超え、東京周辺の男性介護者を学ぶ場にもなつてき

ました。

さらに「会」の活動は都内へ、全国へと広がります。長野県男性介護者の会「シルババックスの会」等とともに「男性介護者と支援者の全国ネットワーク(略称・男性介護ネット)」の結成(2009)へとつながっていきます。荒川さんは「男性介護者ネット」初代会長となります。こうして、男性介護者の会が全国各地で生まれ、男性介護者の姿が多くの人たちに知られるようになってきました。荒川さんたちの活動は、最近、さらに広がりをみせています。「25周年を祝う会」には、荒川区の隣の葛飾区のお寺の若い住職さんが参加していました。その住職さんからお寺で介護者の会を開催して3年になりましたという報告がありまし

十分でない、介護職の「尊厳」を守る仕組みが十分でないことと深く結びついているように思っています。介護職に「やさしさ」を求めるのですが、介護者が日本には欠けています。このことが男性介護者の理解、介護の社会的評価を低くしているとも言えます。介護職のなり手が少ないといわれるのは、こうした背景もあるのではないのでしょうか。

「家族介護者をもめる法律がない」「介護福祉士の社会的評価が低い」「介護福祉士など介護職のなり手が少ない」「腰痛などで苦しむ介護職を守る仕組みが十分でない」ことは、ひとつに結びついているように思います。「命の尊厳」は、障害を持つ人たちの「日常生活の営み」の「尊厳」でもあり、それを支援する人たちの「尊厳」でもあります。外国では、ケアラー法の制定、要介護者と介護者の両方をリスペクトするということが流れになっています。日本社会は、介護者・介護職の理解はまだ広がりをもっていません。

た。地域の介護者の会と宗教者が結びつく、新たな動きになってきました。2000年に介護保険制度が創設されましたがその後、家族介護の姿も変わり、息子の嫁の介護が減り、配偶者や子供の介護が増えるようになり

人間は欲望を本性としている——この洞察が、仏教を含めたインドの宗教思想の根底に流れているように思われます。もしそうだとすると、欲望に身をまかせて生きてはいけないのでしょうか。この疑問への一つの答えを、この詩節は提示しています。快楽(の味)は苦痛である、というのはいかにも初期仏典らしくインパクトがある言葉です。欲望の充足として得られる感覚的な心地よさは、結局のところ、いつまでもそこに安住したいと願うばかりか、さらに心地よいものを求めようとする私たちにとつて、苦に帰着していくような性質のものだということでしょう。「賢者」になることは容易ではないとしても、際限なく欲望の充足を求める私たちが自身に気付くのは大切なこととす。

「家族介護者をもめる法律がない」「介護福祉士の社会的評価が低い」「介護福祉士など介護職のなり手が少ない」「腰痛などで苦しむ介護職を守る仕組みが十分でない」ことは、ひとつに結びついているように思っています。「命の尊厳」は、障害を持つ人たちの「日常生活の営み」の「尊厳」でもあり、それを支援する人たちの「尊厳」でもあります。外国では、ケアラー法の制定、要介護者と介護者の両方をリスペクトするということが流れになっています。日本社会は、介護者・介護職の理解はまだ広がりをもっていません。

要介護者の「尊厳」(介護保険法第一条)は言われますが、ケアラー法が日本にはまだないことも、背景にあると思えます。家族介護者を守る法律がありません。このことは、介護現場で働いている介護職を守る法律が

「賢者」になることは容易ではないとしても、際限なく欲望の充足を求める私たちが自身に気付くのは大切なこととす。

人間は欲望を本性としている——この洞察が、仏教を含めたインドの宗教思想の根底に流れているように思われます。もしそうだとすると、欲望に身をまかせて生きてはいけないのでしょうか。この疑問への一つの答えを、この詩節は提示しています。快楽(の味)は苦痛である、というのはいかにも初期仏典らしくインパクトがある言葉です。欲望の充足として得られる感覚的な心地よさは、結局のところ、いつまでもそこに安住したいと願うばかりか、さらに心地よいものを求めようとする私たちにとつて、苦に帰着していくような性質のものだということでしょう。「賢者」になることは容易ではないとしても、際限なく欲望の充足を求める私たちが自身に気付くのは大切なこととす。

法のことば

たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。「快楽の味は短くて苦痛である」と知るのが賢者である。

(ダンマパダ)一八六、中村元訳

人間は欲望を本性としている——この洞察が、仏教を含めたインドの宗教思想の根底に流れているように思われます。もしそうだとすると、欲望に身をまかせて生きてはいけないのでしょうか。この疑問への一つの答えを、この詩節は提示しています。快楽(の味)は苦痛である、というのはいかにも初期仏典らしくインパクトがある言葉です。欲望の充足として得られる感覚的な心地よさは、結局のところ、いつまでもそこに安住したいと願うばかりか、さらに心地よいものを求めようとする私たちにとつて、苦に帰着していくような性質のものだということでしょう。「賢者」になることは容易ではないとしても、際限なく欲望の充足を求める私たちが自身に気付くのは大切なこととす。

(藤井 隆道)

お知らせ

＊宗教・文化研究所公開講座(ご案内)＊

日時 令和元年9月14日(土) 13:00~16:30
場所 本学B501教室(B校舎5階)
講師・講題 I部 13:00~14:30 「室町期の『浄土真宗』」 龍谷大学文学部講師 大谷 由香氏
II部 14:45~16:15 「真宗聖教における表現の世界~親鸞・蓮如を中心として~」 龍谷大学文学部准教授 能美 潤史氏

＊仏教文化公開講座(ご案内)＊

日時 令和元年10月26日(土) 13:00~14:45
場所 本学礼拝堂(A校舎5階)
講師・講題 「親鸞が開いた仏教とは何か」 龍谷大学教授・本願寺派勧学 深川 宣暢氏

＊本願寺書院・飛雲閣拝観(後期)＊

日時 令和元年10月16日(水) 15:15~17:00
集合場所 京都女子大学「錦華殿」前14:45
募集人数 30名(先着順)

＊秋の見学会(バスツアー)＊

日時 令和元年11月1日(金) 8:30出発~17:30帰着予定(集合8:15 大学J校舎1階フロア)
行先 磯長御廟(叡福寺)、明日香村・石舞台古墳、法隆寺
参加費用 1,100円(昼食代込み)※拝観料等は大学が補助します!!
募集人数 44名(先着)※学生行事週間のため授業はありません。
◆本願寺書院・飛雲閣拝観(後期)及び秋の見学会(バスツアー)の申込期間は令和元年9月24日(火)~10月25日(金)です。※本願寺書院・飛雲閣拝観は10月7日(月)まで。I校舎1階および2階の証明発行機にて申し込みの後、申込書を宗教教育センター(同3階)まで持参してください。

シリーズ 智慧の蔵 25

『ケーキの切れない非行少年たち』

宮口幸治 著 新潮新書 二〇一九年



最近、耳を疑う事件が目立ちます。彼らは、なぜあのような行動に走るのでしょうか。その理由の一つに「認識の歪み」がある、そう教えてくれるのが本書です。

著者の宮口氏は、精神科医として勤務する中で、ある少年と出会い、「認識の歪み」に気付かされたと言います。

犯罪を犯しても、「自分は優しい人間だ」と認識しているのは、反省を強制されても、それは上辺だけの反省でしかありません。宮口氏の出会った少年院の子どもたちに、「自分はどうな人間か?」と質問すると、約八割の子どもが「自分は優しい人

間だ」と答え、驚いたと云います。この答えに、皆さんも驚かれたでしょう。しかし、私が思ったのは、「私たちも大して変わらないのではないか」ということでした。

皆さんは、自分をどんな人間だと思っていますか? 確かに、私たちは彼らのように犯罪を犯してはいません。しかし、彼らと同じように「認識の歪み」は存在します。例えば、嫌いな人が言った言葉と好きな人が言った言葉、同じ言葉であっても聞こえ方が違いませんか。あるいは、怒りに支配されてしまえば、目

に見えるもの全てが怒りの対象になりませんか。間違いなく、私たちにも「認識の歪み」は存在するのです。私たちは、その「認識の歪み」から生じる感情の変化を、何とか調整して生きています。しかし、その調整が出来ているのか? たまたまなのかもしれない。調整できない程の「認識の歪み」が訪れたらどうなるか。私は本書に書かれている少年たちを自分と異質な人だとは思いませんでした。

本書の中では、宮口氏による「認識の歪み」を防ぐ方法も紹介されています。参考になります。その中で、宮口氏が「自分

はどんな人間か?」と質問すると、約八割の子どもが「自分は優しい人

(三浦 真証)